

HIGMA (けものフレンズA プロローグ)

kohar

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そういうえば、ヒグマのフレンズは早死にするらしい

ホツカイドーエリアの9割を占める山に大量発生した黒セルリアン。ヒグマとキンシコウ率いるセルリアンハンターはL♡Lベアルズなどの援軍の力を借りながらセルリアン大掃除に挑む。

しかし、セルリアンが片付いた直後、暴風・吹雪の予報がラツキービーストより告げられる。ヒグマの身を案じたキンシコウはヒグマのいる山の上へと駆け登るが、そこで出会ったのは……

※一部残酷ともとれる描写あり

※公式設定との相違あり。フレンズの性格などいろいろ変わつてます

※あまり書き慣れていないため、違和感を感じる描写、文章がある可能性アリ。間違いやこういう描写がいいと思うといったアドバイスをしてほしいです

※百合要素……あるのかな?

以上の事を容認できる方のみ読んでください

第0話

ジンクス

目

次

1

## 第0話 ジンクス

そういえば、ヒグマのフレンズは早死にするらしい  
キンシコウが生きている間に、ヒグマは5回死んだらしい  
サイキヨーであるが故に、己の力を過信しすぎたらしい

じやああたしは、過信しすぎても死なないくらいに強くなる  
一匹でも多くセルリアンを狩るために、強くなるため  
に、セルリアンを狩る  
キンシコウを泣かせるものか。

「ホートクエリア セーカントンネル前哨基地」

「黒セルリアン大量発生、ねえ」

あたしははちみつジユース片手に、今回の黒セルリアン大量発生事件について聞いていた。中々、面白そうな事件だ。

「ホツカイドーエリアからの避難誘導はほぼ済ませたわ。今回はホツカイドーの山全域、その規模はかなり大きいからセルリアンハンター総動員、有志のフレンズもかき集め三手に分かれて大掃除に臨む。山の上で狩るチーム。山の下ら辺の森で狩るチーム、山のふもとで警戒、避難の遅れたフレンズや負傷したフレンズを救助するチーム。既に皆ホツカイドーに到着して狩り始めている頃ね」

今回の大掃除作戦のメンバーリスト（参加フレンズ達の似顔絵が描いてある。作：タイリクオオカミ）眺めながらキンシコウは言った  
「L<sup>ラジラブ</sup>L<sup>ラジラブ</sup>は参加すんの？」

「L<sup>ラジラブ</sup>L<sup>ラジラブ</sup>ベアーズ？一番乗りで行つたわ」

「やつぱりな。ホツカイドーはでつかいどーとかいつて参加したんだろうな。まああいつらと私がいればラクシヨーだろ」

クマのフレンズは強いというのが相場だ。<sup>ラジラブ</sup>L<sup>ラジラブ</sup>L<sup>ラジラブ</sup>はセルリアンハンターに匹敵するほどの戦闘力を持つクマの三人組。戦闘のプロだが

おつきーものにしか目がなく、セルリアンハンターへの協力も気分次第だ。ま、ホツカイドーだつたら間違いなく参加するが

「この前の大量発生時も、先代のヒグマはそう言つてたわ」

突然声色を暗くしてキンシコウが言う。まあ言うことは予想できる。先代の事だ。

「先代のヒグマはホツカイドーで死んだわ。その先代も、先代の先代も。私の出会つたヒグマは全員、ホツカイドーで、大量発生した日に、死んでるわ」

「それがどうした、あたしや先代より強いから心配すんなつて」

「先代だつてそう言いながら死んだのよ！その先代も！みんな！」

キンシコウが血相を変えて怒る。だがその目には涙が浮かんでいる。先代のことを思い出したからだろうか。

「もう一度とあなたの死体なんて見たくないの！ヒグマが帰つてこないつて言われて、雪山の中を探し回つて、やつと見つけたと思つたら、元の姿に戻つてる上に胸を貫かれているヒグマの死体が、雪の中に埋もれていたの、それも毎回。その度にまた守れなかつたつて、もつと強ければつて、自分を責めて、後悔して、叫んで、泣いて、ヒグマさえ守れない私はセルリアンハンターをやめようとすら思つた。二度と新しいヒグマには会いたくないとすら思つた」

キンシコウの声が震えている。怒りというより、悲しみの感情が強い。思えば、初めはセルリアンに囮まれながらめそめそしていたところを、あたしが助けたんだつけ。まさかそんなキンシコウがセルリアンハンターのリーダーをやつていたとは夢にも思わなかつた。

「でも結局、ヒグマと出会つてしまつ。そして一緒にセルリアンハンターに戻つてしまつ。みんなを助けるために……だからつ……お願ひだから……もう死なないでよ……!!」

うわーんとキンシコウが号泣しながら抱きついてくる。まつたく、キンシコウを泣かせるほど弱つちい先代が恨めしい

「あーもう悪かつた悪かつた！死なないから安心しろつて！泣くな泣くな」

涙で私の服を濡らすキンシコウを抱き締めて撫でる。結局慰めるまでに5分ほどかかった。やれやれ。

「はあ……いい、ヒグマ？ 三つ約束して。一つは単独行動しない。二つは油断しない。三つは無理しない。わかつた？」

「わかつた。約束するって」

「とか言つて単独行動するのはわかつてることさ、何が起ころるかわからぬわ。気を付けること」

「あーはいはいわかつたわかつた！」

「まつたく、じや、そろそろ私たちも向かいましょう」

「ああ」

それぞれ武器を担いで、ドアから出る。ここからはジャパリトレインのセーカントンネルラインに乗つて、ホツカイドーエリアに赴くことになる。

こんな態度をしておきながら、あたしは心の中では決意していた。今回こそ先代のようなヘマはしない。